台地上に位置する庄園村落の歴史地理学的考察

——庄園絵図を史料として——

水田義一

【要約】 本稿は畿内南縁の中世庄園の開発状況と集落を扱かったものである。事例に取りあげたのは和泉国日根野庄、紀伊国井上本庄、同桙田庄である。絵図に描かれた農耕地の分布する地域の水利灌漑組織を考慮すると次の事実が知られる。すなわち、溜池によって台地上の耕地を灌漑している。更に自然河川から引いた用水路によっても灌漑し、溜池と相補って灌漑していた。近世の大規模な水利工事が行なわれたのちも依然として用水が不足していたこれらの庄園は、中世では耕地が狭少で非耕地（荒地）を村内に多く含んでいた。従って生活の基礎を農業に頼っていた集落は小規模で数も少ない。そして近世の藩政村の原形は桙田庄以外は既に見えているが、集落形態については今後の課題としなければならなかった。

史林 五五巻二号 一九七二年三月

はじめに

中世における村落は、畿内型・中間型・辺境型という庄園制度の多様性[1]に加え、条里の施行された平野、平地の少ない山間部、開発の遅れた台地等の地形条件によって、非常に多様な姿を示していたと考えられる。清水三男によって庄園と中世村落は別個に存在したのであるとの指摘がなされ[2]、米倉二郎によって庄園村落は散村から集村に大部分が移行したという仮説も提示された[3]。しかしながら散村の例とされた遠江国池田庄[4]、薩摩国入来院[5]は現在も引き続き散村であり、小村の事例としてあげられた備後国大田庄[6]も、現在小村である。更に集村の事例とされた大和国若槻庄[7]・大和国池田庄[8]・摂津

国榎坂郷[9]等は現在も集村である。これらの集落には形態的に変化していないものが大部分であるが、若槻庄・榎坂郷では、散村と思われる村が集村化した結果、現在にまで引継がれる集落を形成したことが知られている。しかし榎坂郷の場合には集落を構成する屋敷数は登録農民数の一割強にすぎない。たとえば若狭国大良庄においては『百姓の屋敷内を割り分け、居之置かしむる親類・下人に対する在家役、及び大草の役は停止』[10]とあって、登録された百姓屋敷内にはさらに多数の実際の耕作者が居住していることが知られ、また丹波国宮田庄では四人の屋敷登録人に対して三十余宇の家敷が存在している。[11]あきらかに、文献史料にみえる屋敷数から想定される集落と、中世に実際存在した集落との間には大幅な齟齬がみられる。[12]すなわち、史料によって想定される集落は現実よりも余りに戸数が少ない。

中世村落を復元する試みとして、庄園絵図によって視覚的に捉えられた景観を、現地との比較対照によって行なう方法がある。すでに米倉二郎によって庄園絵図は村落研究に取りあげられ、集落の起源・下地中分線の復元・地形の変化などが論じられた。[13]米倉と同じ尾張国富田庄絵図をとりあげた板倉勝高は、絵図に記載された屋敷を名主級の家宅・神社・寺院・荘官・地頭級の家宅の四つに分類して構造的に追求した。[14]近年渡辺久雄は伯耆国東郷庄をフィールドに微地形と絵図とを対比して、荘園の範囲の復元と集落の位置比定を行ない、更に絵図作成技術・下地中分線の意義をも論じている。[15]庄園絵図は歴史学の分野においても西岡虎之助によって利用された後、[16]近年難波田徹によって、庄園絵図作成の基盤となった境界争論を中心に論じられている。[17]

従来庄園絵図の現地比定や庄園村落の復元の研究において有力な武器となったものは条里地割であった。古代の東大寺領庄園の研究[18]、尾張国富田庄の研究はこの方法によって為された典型的な例である。

本稿では、そのような武器を持たぬ非条里地区において、庄園絵図を武器としつつ庄園村落の様相を調べてみたい。フィールドとして取上げる三庄園には庄園絵図のほかには史料が残存せずその実体に曖昧な点が多い。そこで歴史地理学的方法によって、[19]現景観、過去の景観と絵図を対比しつつ研究を進めてゆく方法を取りたい。以下庄園絵図の作成の経過・

絵図の特色、庄域内の景観と絵図との比定、そして庄園村落の様相の想定の順で叙述を進める。

そしてここでは九条家領和泉国日根野庄、随心院領紀伊国井上本庄、神護寺領紀伊国桙田庄の三つをサンプルとして取りあげる。

① 永原慶二『日本封建制成立過程の研究』昭和三六年。
② 清水三男『日本中世の村落』昭和一六年。
③ 米倉二郎『東亜の集落』昭和三五年。
④ 藤田元春「王朝末期の一農村」（『歴史と地理』三十巻二号、昭和七年）
谷岡武雄「松尾社領駿河国池田庄の歴史地理学的研究」（『史林』四九巻五号、昭和四二年。
⑤ 永原慶二「中世村落の構造と領主制」（『中世の社会と経済』昭和三七年所収）
⑥ 高重進「大田庄における古代村落の崩壊」（『広島大学文学部紀要』十七号、昭和三九年）
⑦ 渡辺澄夫『畿内庄園の基礎講造』昭和三一年。
⑧ 渡辺、前掲洋⑦
⑨ 島田次郎編『中世村落史の研究』昭和四一年
⑩ 渡辺久雄『条里制の研究』昭和四二年
東寺百合文書ほ一七
⑪ 網野善彦『中世荘園の様相』昭和三九年
⑫ 田中稔「丹波国宮田庄の研究（『史林』三九巻四号、昭和三一年）
⑬ 米倉、前掲注③
⑭ 板倉勝高「尾張国富田庄を例とせる中世村落の構造」（『東北地理』五巻一号、昭和二七年）
⑮ 渡辺久雄「松尾社領伯耆国東郷庄の一考察」（『歴史地理学紀要』10、昭和四五年）
⑯ 西岡虎之助『荘園史の研究』上下、昭和三九～四〇年
⑰ 難波田徹「庄園図の歴史的性格」（『中世の権力と民衆』昭和四五年）
⑱ 谷岡武雄『平野の開発』昭和三九年
⑲ 藤岡謙二郎『先史地域と都市域の研究』昭和三五年

一　九条家領和泉国日根野庄

(1)　日根野の概要

泉佐野市の南部を流れる樫井川によって形成された扇状地上に日根野という大字がある。近世以降日根野村として存続し、昭和二十九年に泉佐野市に編入された。行政的に沿革をたどれば、①古代には日根郡賀美郷に属しているが、この賀美郷の範囲は扇状地から西の条里地割を残す上郷村をも含んでいた。日根野は桓武天皇の行幸して遊猟した土地であり、原

野となっていた。天平十三年（七四一）には行基年譜に日根里として地名が載っているところから、この頃日根野は賀美郷より分置されたと推測される。[2] その後鎌倉初期までに九条家を領家とする庄園となっている。日根庄あるいは日根野庄と呼ばれるこの庄園は鎌倉時代には入山田村・井原村・日根野村・鶴原村・上ノ郷村に分かれている。その範囲は樫井川の河谷から扇状地の末端までの東西八粁、南北五粁にも及ぶ広い範囲であった。代々その庄官を執行している日根野氏は、隣接する東北院領滝庄の公文職・下司職をも兼ねている。日根野氏は古代以来、大阪南部に勢力を有した豪族であったと推測される。[3]

扇状地の開発に際して、用水管理技術は重要な役を占めていたと思われ、領家の九条家は「開発領主」と称して在地に勢力を張ってきた。正和五年（一三一四）の絵図に大井関大明神と見えている[4]現在の大井関神社の中の坊であった慈眼院[5]には、鎌倉初期の秀れた阿弥陀如来像と五重塔を残しており、九条家の寄進によるものと考えられるところから、用水管理に伴なうその強い影響力がうかがわれる。大井関神社は今も広い氏子圏を有し、近世には樫井川水系の村々の水郷の中心となっていた。[6] 現在延喜式内社の日根神社も大井関神社境内に祀られている。

九条家は日根野庄の経営のため延喜二年（一三〇九）に検注を行なっている。その史料は失なわれたが、同時に作成されたと考えられる日根野村絵図が残存している。[7] 絵図の裏の右肩には、

日根野村絵図沙汰人注進之

正和五年六月十七日

前備後守　（花押）

少し離れて中央には、

□代以円　（花押）

検注　公文代祐心（花押）

の注記がある。

この裏書きから検注の数年後に庄官達によって村絵図が作成されたことが知られる。絵図表面にある各種の注記は検注の結果の一部を記入したと考えられるが詳しくは後述する。

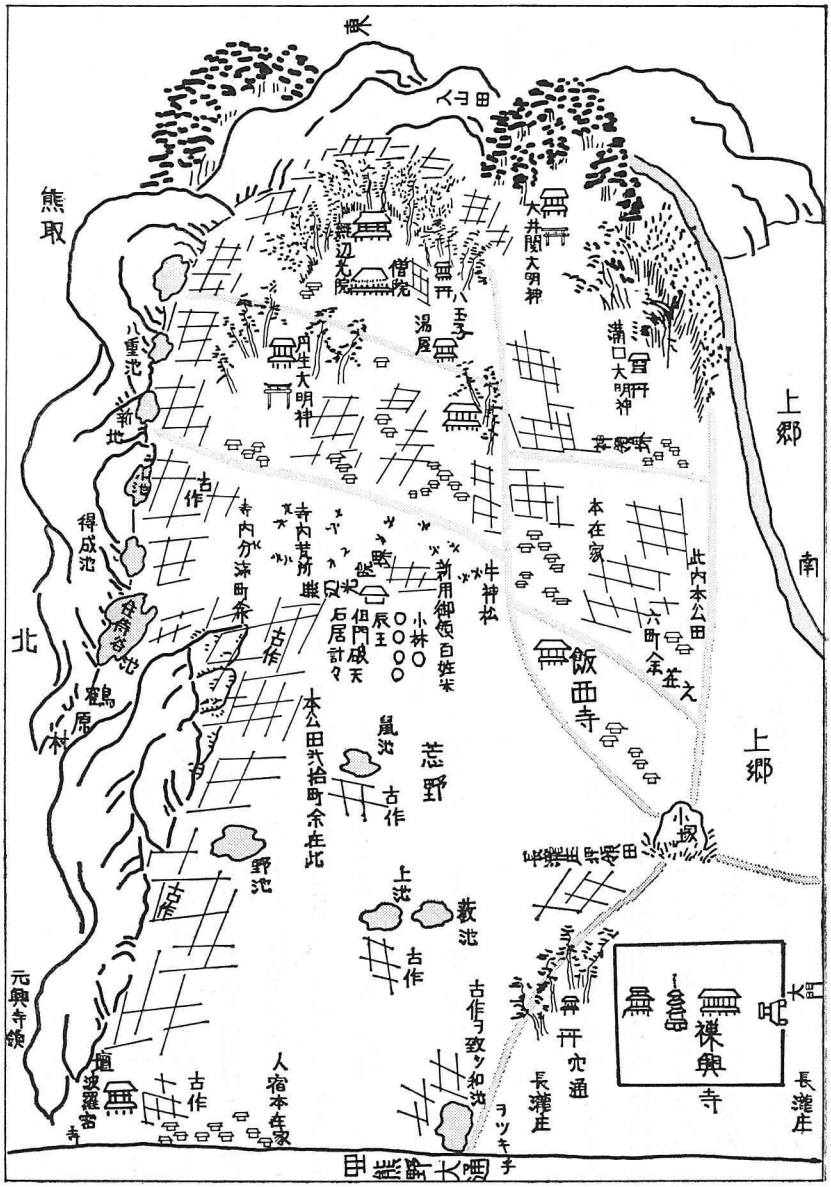
九条家の支配は南北朝の内乱を経て次第に弱くなっていった。南北朝の内乱期に日根野庄は日根野氏の兵粮料所と指定され、更には年貢も押領された。十四世紀中に鶴原村も失なった。その後九条家による庄園の返還要求にもかかわらず、守護細川氏との間の半済によって上の郷・井原村を失ない、室町中期以降九条家の支配したのは入山田村・日根野村の二村にすぎなかった。この二村においても守護の乱入、紀伊の根来衆の来襲によってともすれば支配権を失ないがちであった。文亀元年（一五〇一）より永正元年（一五〇四）までの四年間、領主前関白九条政基が老令にもかかわらず在地に下向して、直接支配の立て直しを計ろうと努めている。その時の日記[8]によれば、元亀元年（一五〇一）に日根野の村民は武士の跳梁を受け、家屋を焼かれて山中に避難するなど不安定な生活を送っている。

それにもかかわらず、溜池の造成も見られ、近世に至ると俵屋新田その他小規模な開発が行なわれている。以下中世日根野の村落の様相を、庄園絵図を手掛かりに探ってみる。

(2) 日根野村絵図の記載

日根野村絵図は縦一一二・九糎×横一一〇糎の和紙に墨で描かれ、山・樹木・荒地が緑で、川が青色で彩色されている。樫井川が形成した扇状地を西から鳥瞰し、地形を巧みに浮び上がらせている。山地・丘陵を周囲に描き、耕地や荒地となっている扇状地は中央に描かれている。扇頂部と思われる東部に大井関神社、無辺光院およびその他の神社が、西部の大道（熊野街道）沿いに穴通神社（蟻道神社、禅興寺・壇波羅密寺が描かれている。民家は大部分は中央部に点在し、一部が街道沿いに街村をなしている。絵図の注記には「本在家」「人宿本在家」と記されている。耕地は当時の庄園絵図特有の表現である交叉した直線によって示されている。そして耕地は主に丘陵沿い及び民家の周辺に描かれている。特に丘

第1図 日 根 野 村 絵 図


熊取
上郷
南
上郷
北
飯西寺
荒野
長滝庄
長滝庄
元興寺領
人宿本在家
古作
古作
古作
古作
古作
古作
本公田弐拾町余在此
寺内分法町余
寺内其所堀
新用御領百姓
牛神松
本在家
六町余
此内本公田
大井関大明神
湯屋
僧院
無辺光院
内生大明神
八重池
新池
得成池
鶴原
野池
上池
敷池
鼠池
小林
小堀
開穴通
ヨツキチ

陵沿いの耕地には「古作」と注記がなされ、古くからの耕地であったことが推測される。さらに「本公田弐拾町余在此」「此内本公田六町余在此」と注記があって公田から庄園領となった田地が二十六町余りもあったことがうかがわれる。その他に「寺内分染町余」、「長滝押領田」と記されている通り、他領の田地も若干存在していた。中央部は緑色で彩色され「荒野」あるいは「寺内分荒所」と記された未開地が広く展開している。中心部にある「新開御領百姓など……」という記載から、当時荒地が開田化されていったことがうかがえる。農耕の基礎となった灌漑施設としての溜池群が山麓に並び、一部は荒野の中央部も見られる。その水懸りと思われる耕地には「古作」とある。熊野大道沿いの溜池には「古作ヲ致シ和池ヲツキ乎」と記されている。その意味は不明ながら、灌漑設備を新しく築造したことが知られる。道路は西端を南北に熊野大道（街道）が走る他、村内に数本の道が記されている。そこで注目されるのは上郷・長滝・日根野三村の境には「小塚」と記された石標が据えられていることである。

以上のように日根野については地形・耕地・溜池　寺社・集落・その他が描かれているが、日根野に隣接する村については、大きな寺社を除き地名以外は記されていない。

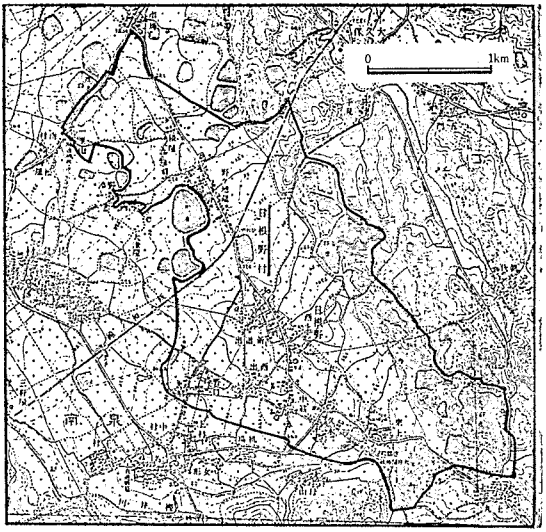
描かれた民家の性格・注記の耕地面積の村内にある総耕地面積に対する割合等は検注の文書が残存せず明らかとはならない。

(3) 日根野村の現状

日根野村絵図に描かれた範囲は、樫井川によって形成された扇状地の大部分を占める。日根野の東部と北部は扇状地の周囲の丘陵によって限られる。南部は樫井川によって限られ、西南部は上郷・長滝庄に隣接し、西は熊野大道によって限られている。従ってその範囲は現在の行政区画からするとほぼ旧日根野村・旧市場村を合わせた区域に相当する。

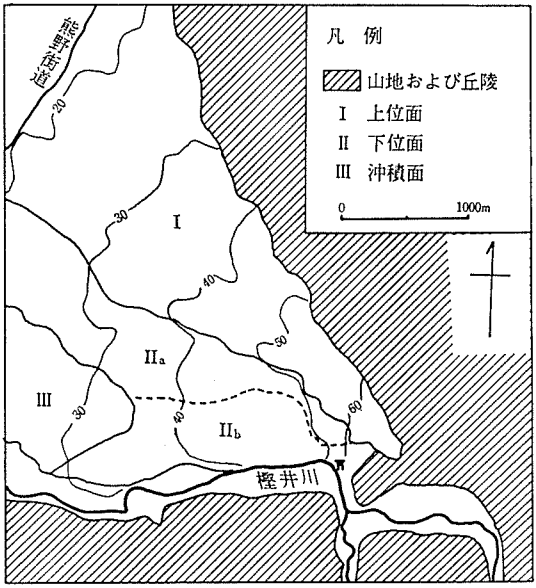
灌漑技術の十分に発達していない中世の農耕に大きい影響を与えた日根野の扇状地の地形の特徴は以下の如くである。樫井川の南には平坦面はほとんどなく直ちに基盤となる花崗岩の山地及び大阪層群よりなる比高七〇～三〇メートルの丘

第2図　日根野地形図

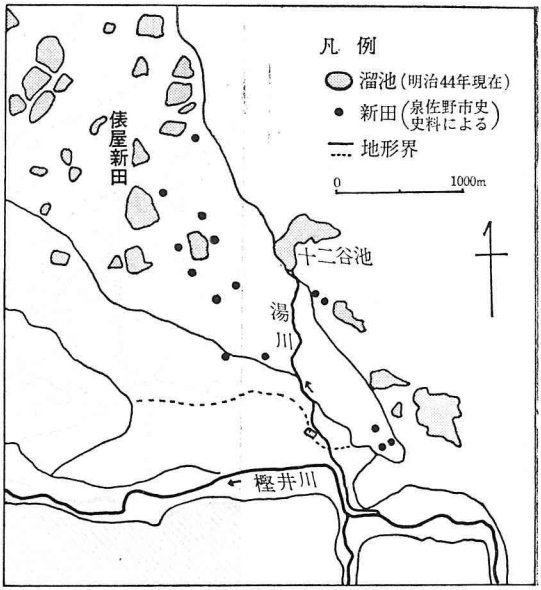


陵に続く。扇頂部より泉佐野市街地にかけての道路より北は大阪層群からなる丘陵となる。この丘陵は西へ延びて北の鶴原・熊取町との境をなしている。日根野の扇状地は第3図に見る如く、周囲を山地及び丘陵によって囲まれてほぼ三角形をなしている。和泉山地を出て日根野の扇頂に達した樫井川は、扇状地を深く開折して流れる。扇頂部の大井関神社の背後で水面との比高は約一〇メートルに達する。日根野の扇状地は第3図にみる如く、北より南へ向かうにつれ高度が順次下がる。高位面と低位面は比高約三メートルの崖面によって区別される。更に上郷で沖積地と台地面が区別される。これは樫井川が扇状地を流れるにあたって、北から南へと間歇的に流路を変えて現在の流路に至ったことによるものと考えられる。また各地形面には、例えば白水池へ向かう帯状の窪地

第3図　日根野の地形分類図



第4図　近世に新田となった位置



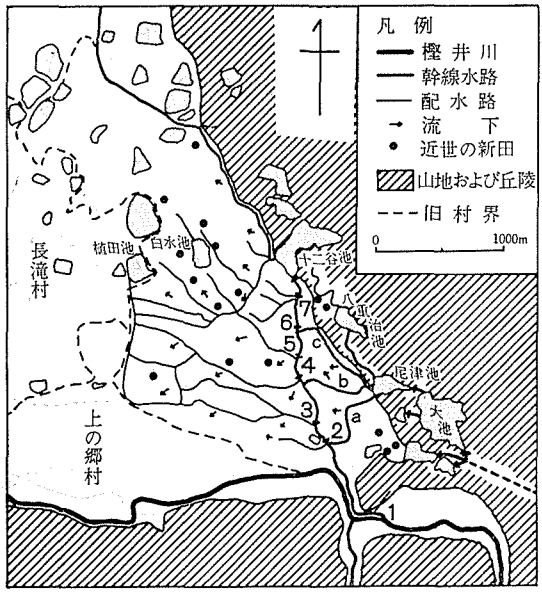
や鞍部をもっており、侵食は段丘形成後も進んでいたと考えられる。

複雑な地形面に応じて耕地の区画も、山麓付近は等高線に平行に細長く、或いは谷に沿って不規則に細かく、或いは崖面に沿って弧状を呈する。扇央部にあたる野口・西出の西部・野々地蔵付近は耕地の区画が比較的方形に近く、一筆毎の区画も大きい。しかし旧市場村・長滝村・日根野村三村の境界にあたる地区は戦争中に飛行場建設の計画がなされ、区画整理が行なわれたので、かっての土地区画の形状は不明である。

耕地区画の形状は地形によって影響されるのみならず、開発の事情・時期によっても影響される。近世における新田開発は史料によれば約二三町歩行なわれたことが知られる。その位置を小字地名によって比定すれば第四図の如くなる。新田は(イ)郷の池・八重治池等の丘陵沿いの土地、(ロ)白水池周辺の土地、(ハ)上郷長滝庄に隣接する地区に分布し、(イ)の地区内の耕地は傾斜地にあるため一筆耕地の区画は細かい。(ロ)の地区は逆に一筆耕地の区画は大きく、その形状も方形をなすものが多い。(ハ)の地区は史料には僅かの新田開発しか記されていないが、比較的大規模に開田され、他の地区は小規模に少しづつ開田されていったものと推測しえよう。

日根野の開発の事情を推測するために水利組織を述べる。現在日根野は旧市場村と共に泉佐野市日根野土地改良区に属している。その用水源は樫井川と丘陵沿いの溜池に頼っている。灌漑方式としては溜池灌漑卓越地区に属しているが、[9]天

第5図　日根野水利系統図



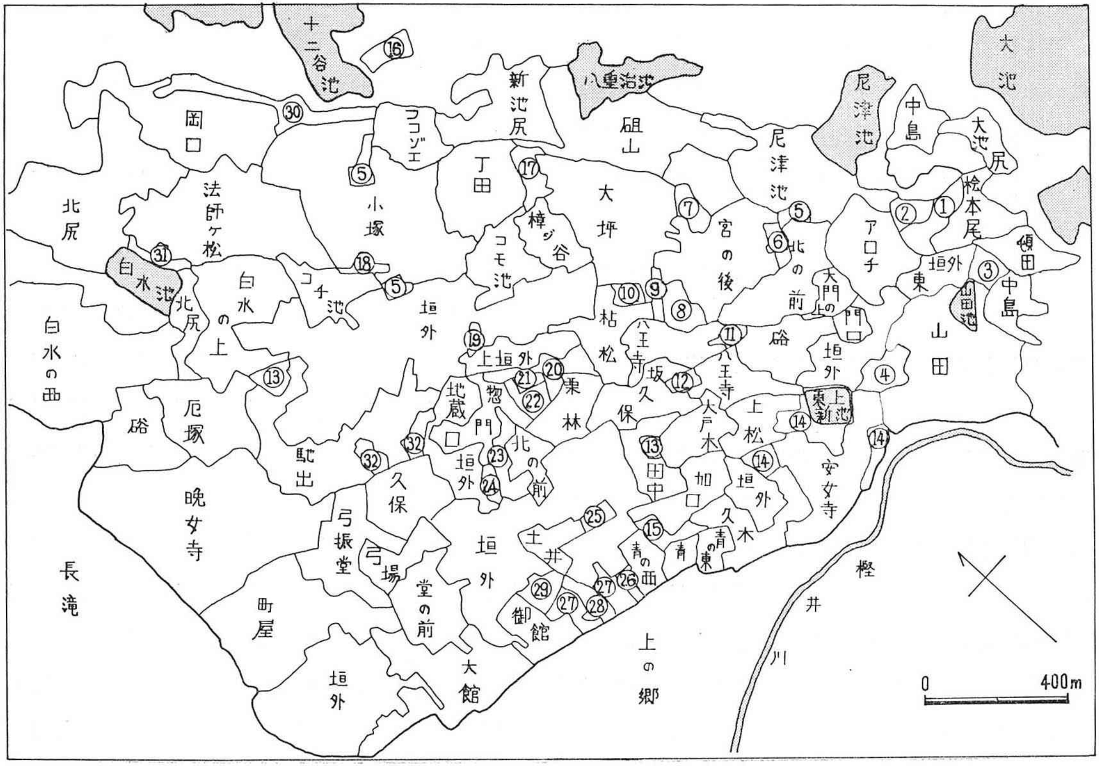
a	中樋水路
b	底樋水路
c	市道水路
1	取水口
2	ゴロタ樋
3	八王寺樋
4	ドンド樋
5	チョッカイ樋
6	丁田樋
7	フコヅエ樋

水を溜池に貯水するのではなく、樫井川の用水を溜池に貯水している。すなわち樫井川の水を上流の大木の取水口にて雨山用水⑩へとり、土丸の北の地点で分枝して大池と郷の池へ貯水する。五月までは尼津池・八重治池・十二谷池は天水を貯水する。灌漑期になると大池から尼津池へ配水した後、尼津池から各水田へ配り、同時に大井関神社の境内を通る湯川用水によって樫井川より直接水を取り入れ各水田へ配水する。八重治池は主に天水によって貯水し十二谷池は湯川用水によって貯水するが、灌漑期に水が不足する時には大池から用水を補う。

水利事情を述べるため実際の配水方法を詳述する。⑪まず大池のすぐ下にある十郎池は小字「檜本尾」、「アロチ」に配水する。尼津池は市道水路と底樋水路によって「宮の後」、「市道」付近に配水し、中樋水路によって「北の前」、「大門の上」、「塔」に配水する。以上の区域に灌漑して余った用水は湯川用水路へ流れ込む。

湯川用水は大井関神社の境内を通って、慈眼院の宿坊の下を抜けた後、丹生神社跡まで台地の上位面の崖面に沿って流れ、十二谷池へ通ずる。途中三ケ所の地点で尼津池の余水を受けて水量を増し、台地の上位面の水田へ配水する。湯川用水はまず東上新池の手前で中樋水路の余水を受け、ゴロタ樋

第6図　日　根　野　小　字　図



①にごり池　②檜本尾　③山田口　④笠松　⑤硲　⑥曾根　⑦市道
⑧丹生神社跡　⑨北の前　⑩宮の後　⑪橋詰　⑫久保の後　⑬垣外　⑭馬場
⑮青の北　⑯木綿屋谷　⑰新池尻　⑱中野　⑲田中　⑳大将軍　㉑仏御前
㉒地蔵の下　㉓地蔵垣外　㉔北垣外　㉕ミカド　㉖小堂の前　㉗小堂
㉘青の西　㉙畠中　㉚十二谷　㉛白水の東　㉜牛神

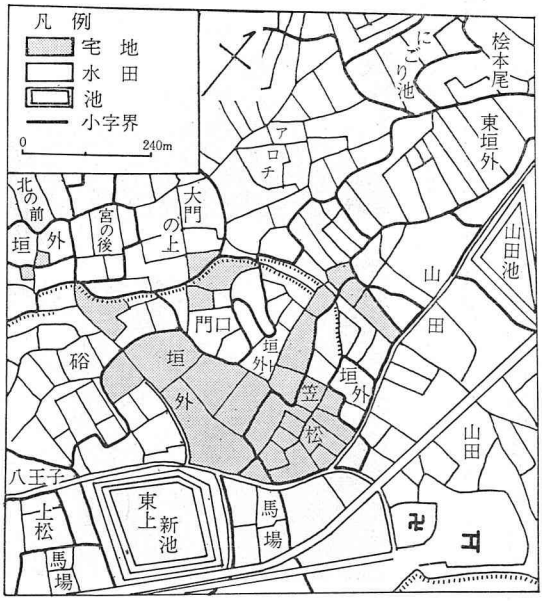
より支路へ分かれて「久の木」、「青」及びその周辺へ配水する。次いで八王子樋より支路に分かれて「八王子」、「加口」「御館」から「垣外」まで配水する。八王子樋を過ぎて、湯川用水は尼津池底樋水路の余水を受けた後、ドンド樋から「宮の前」、「坂久保」、「垣外」、「堂前」、「町屋」へ配水する。末端の垣外は八王子樋と補完しながら配水する。更に丹生神社跡の境内を通った湯川用水は扇状地の上位面に流路をとり、チョッカイ樋に至る。チョッカイ樋より支水路を分け、西上の集落の周辺の水田へ配水する。次いで市道水路の用水を受けて丁田（チョウダ）樋およびフコゾエ樋によって付近の水田へ配水され、余った水は十二谷池へ貯水される。なお末端の樋まで水がない場合は十二谷池から水を逆流して灌漑する。

第五図に明らかな如く湯川用水は、上流の樋の灌漑面積が広く下流の樋の灌面積は狭い。言い換えれば湯川用水は扇状地下位面を中心に漑樋し、上位面はほとんど灌漑しない。一方天水に頼る八重治池・白水池は、灌漑面積は非常に少ない。用水事情の悪い地点は八王子樋の末端部である。

以上を要約すれば、日根野の水田の大部分は大池を親池とする溜池群によって灌漑され扇状地の下位面は湯川用水が主として灌漑する。

水利施設の成立に関する史料として最も古いものは庄園絵図の記載である。次いで十二谷池が応永二六年（一四一九）に日根野・上の郷・鶴原村三村の農民によって築造され、永享十二年（一四四〇）に改築されたことが知られている。[12] しかしながら十二谷池は既に庄園絵図に記載のある住持谷池と名称が同一であり、位置もほぼ同一地点と考えられる。従って応永二六年の溜池の築造とは庄園絵図に見える小規模な溜池を大規模なものへと改造したことを指すと推測される。大池の築造期は不明であるが、樫井川から大池への取水路が建設されたのは寛文十二年（一六七二）である。[13] 従って大池が親池の役割を果たすのはこの時以降と想定される。湯川用水の成立に関しては、庄園絵図には用水は描かれていないが、滋眼院所蔵の境内図に既に描かれている事と、庄園図に大井関神社が「大井関大明神」として記かれていることの二点から、庄園図の描かれた時には湯川用水は既に築造されていたと推測しえよう。

第7図　無辺光院跡の地割（垣外門口）（昭和32）



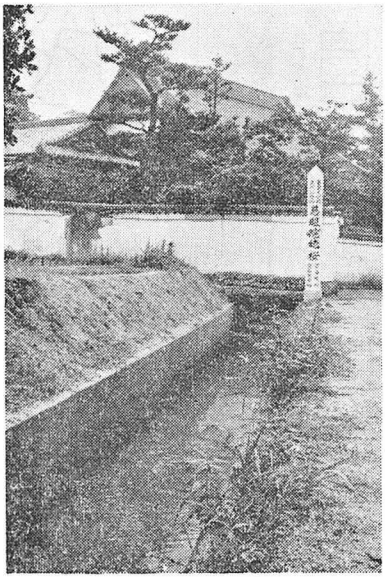
(4)　日根野村絵図の位置比定

神社としては、東端に大井関大明神があり、その他に溝口大明神・丹生大明神および長滝庄に穴通神社（蟻通神社）が見える。大井関大明神は現在も扇頂部に式内社日根神社と共に祭られて広荘な境内を有する。大井関神社は和泉五社の一つに数えられる有力な神社で、現在その氏子の分布範囲は日根野のみならず上の郷・長滝をも含む。[14] 溝口大明神丹生大明神は共に大井関神社の内部に移されて祭られている。長滝の穴通神社は秋草子にも載っている有名な神社で、第二図に参道と共に載っているが、第二次大戦中長滝の集落の中へ移された。

寺院は無辺光院が絵図には描かれているが現存はしない。絵図の表現から地形を考えると本堂の背後を叢林が弧状に取り巻いておりその背後に傾斜面があると考えられる。その地形に当る地点は扇状地の上位面と下位面の地形区界にあたると思われる。すなわち都市計画図の小字「門口」にあたる。絵図では僧坊・湯屋・惣門を有している大寺院であるが今は「惣門口」という小字名を残しているにすぎない。現在注目される寺院は慈眼院である。前述の如く鎌倉期の阿弥陀像を有し、大井関神社の神宮寺をなしていた。[15] 写真に見る如く樫井川の水を引いた湯川用水は慈眼院の僧坊の下を抜けている。従って大井関神社と慈眼院は用水権に関して強い権限を有していた事が推測される。

日根野村にはその他十七世紀以降創立された寺院のみし

写真1　湯川用水と慈眼院



かなく、中世以来存続する寺院はない。又、絵図の禅興寺・壇姿羅密寺は長滝・市場内に僅かに塔をとどめるにすぎない。[16]

集落に関しては、現在では旧日根野村役場のあった西上が戸数を増し、明治初期の仮製地形図に見る小村状の様相は既にない。江戸中期に描かれた和泉国細見図[17]によれば、藩政村日根野村の集落は次の地区に描かれている。即ち、東上・溝口・久の木　中筋・青・願仏　心堂出・堂出・西出の九つである。そして現在の旧日根野村内の集落のうち、野口は上の郷に所属し、野々地蔵、俵屋新田は新田として所載されている。江戸中期に十二の集落群に描かれている日根野は仮製地形図によれば東上、西上、新道出　中筋・西出・野口・野々地蔵・俵屋新田の八集落に減少している。集落は江戸期に次第に凝集していく傾向がみられる。

日根野は何度も中世を通じて戦乱の舞台となり、南北朝期には槌丸城をめぐって戦が行なわれた。十六世紀初頭の政基公旅引付によれば、[18]庄民は堺に本拠をもつ守護細川氏方の武士に跳梁されて僅か数カ年の間に数回の被害を受けた。更に武士と和泉山地の南の根来衆の対立から日根野が衝突の舞台となり、その度に庄民は家を離れて背後の山へ一時避難した。以上のような戦乱のため集落の様相には若干の移動が考えられる。

絵図に見える集落は小塚より八重池へ至る道路沿いに三～九戸ずつ並んでいる。各集落の位置の比定のために絵図に見える名称のうち現存しているものを探してみると、小字「八王子」、「小塚」「牛神松」がある。このうち小字「小塚」は余りにも広大で位置比定の基準にとり難い。絵図中の小塚という石標があったとおぼしき野口の西の田圃の畦畔上に写真の如き天保九年の銘の石碑が残っている。[19]その他位置比定の基準となるのは中央の大きな建物である。無辺光院の本堂か

写真2　野口南方の塚

ら正面にあり、その地点には現在小字「惣門口」が残っている。

(5) 十四世紀初頭の日根野の様相

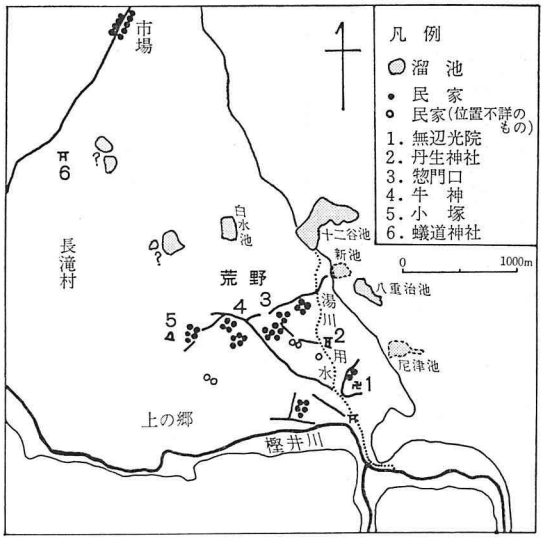
前項の調査によって集落の位置を推測し日根野村の中世的景観を推定したものが第八図である。明治二〇年の仮製地形図の道路と、都市計画図に見られる小さな道路とをもとにして、前述の景観要素をも考慮したうえで、絵図に描かれた中世の道路を推定し、それを太線で記入した。

扇状地の中央には荒野が展開している。耕地になっている部分は山麓付近と、湯川用水から水を引きやすい扇状地下位面である。絵図の注記には本公田として合計二六町余、寺内分七町余の耕地面積が記されている。間接的な資料ながら「政基公旅引付」には応永二四年（一四一七）の日根野村の百姓名の田地二五町二反六十歩総計五四町余とあり、公田の系統をひく百姓名の保有面積は村絵図の注記にほぼ照応している。村絵図の総計三三町余、応永二四年（一四一七）の総計五四町余の面積は昭和初期の耕地と比べて非常に少ない。

耕地は水利系統からみて、溜池によって灌漑される丘陵沿いの地区と、湯川用水によって灌漑される八王子から上の郷にかけての地区とに分かれていた。推測を加えるならば十六世紀初頭の日根野庄の東方・西方の番頭制[20]はこの二灌漑地区に対応するものであろう。東方は湯川用水に、西方は溜池灌漑に依存した。守護勢力に浸透された時、西方は守護の勢力下に入り、東方は領家九条家にあくまで従った。それは東方が武家方の本拠泉佐野に遠い故のみでなく、水利権を通じて強く領家と結びついていたからであろう。

集落のうち熊野街道沿いに九戸並び、人宿本庄家として既に宿場を形成しているのが現在の市場にあたる。中央部に描

第8図　日根野村想定図



かれている集落はいずれも耕地と荒地の接点に位置している。集落及び道路は上郷・長滝へ通ずる道路を中心に配置され、西上―野々地蔵方向へ通ずる現在の道路の配置と全く異なる。集落の規模も荒地を周囲に広く有していた西上が最も拡大している。そして無辺光院の境内であったと思われる丹生神社付近の民家は消失している。即ち既に開発の割合進んでいた下位面の集落は固定的であるが、開発の進んでいない上位面は中世以降の変動・新設の行なわれた集落が多い。

最後に庄園絵図の地図としての役割を考えるならば、基準の少ない台地を表現するに際して部分的ひずみが大きく、山地丘陵の表現も正確な描写とは言いえず、その点を割引いて見なければならない。が、その景観要素の豊富さは庄園の様相を示す資料として優れたものである。

① 『泉佐野市史』昭和三二年による。
② 井上光貞『日本古代の国家と仏教』昭和四六年
③ 前掲注①
④ 宮内庁書陵部所蔵日根野村絵図
⑤ 慎眼院所蔵井関神社境内図
⑥ 大越勝秋「和泉における宮卿と農業用水・共有山」(『歴史地理学紀要』9・昭和四二年)
⑦ 前掲注③田沼睦・島田次郎「荘園制の解体と村落」(『日本歴史論究』所収、昭和三六年)
⑧ 前掲注①
⑨ 竹内常行・堀内義隆「大阪平野南部の溜池灌漑・とくに樫井川流域について」(『地理学評論』三二巻三号、昭和三〇年)
⑩ 昭和35年の大阪府農業改良事業により完成。その前は雨山を迂回して通じていた。
⑪ 日根野土地改良区事務所にて聴取。
⑫ 前掲注①

⑬ 前掲注①
⑭ 大越、前掲注⑤
⑮ 前掲注④による。
⑯ 前掲注①
⑰ 前掲注①所収
⑱ 宮内庁書陵部『政基公旅引付』昭和三九年
⑲ 道路が開田によって移動し畦畔に残されたと考えるられる。
⑳ 田沼睦「公家庄園の動向」（『宮内庁書陵部紀要』5号、昭和三七年）

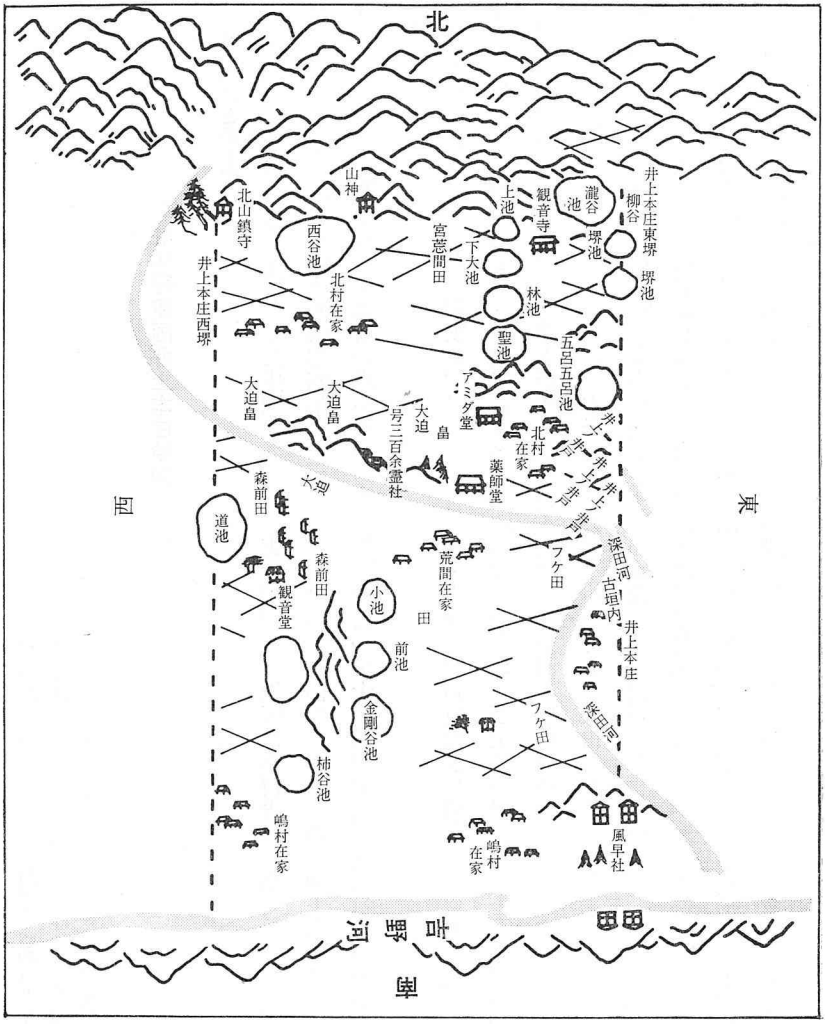
二　随心院領紀伊国井上本庄絵図

(1)　井上本庄と同絵図

紀伊国井上本庄は随心院を領家とした庄園であった。東に隣接する地区が粉河寺域にあたり、井上本庄と粉河寺領との間に争論がくり返された。そのうち明徳四年（一三九三）の争論の際に作成されたものが井上本庄絵図である。[1] 井上本庄の在地の動向に関しては明きらかではない点が多いので、絵図によって十四世紀末期の庄園村落の開発の状態を復元してみたい。

井上本庄絵図[2]は六五×五三糎の和紙に、墨および青・緑・赤などで彩色豊かに描かれている。北に和泉山脈を南に紀の川（吉野河）および紀伊山地を描き、朱線によって西隣の井上新庄および東隣の粉河寺領との境界を明示する。その内部に井上本庄の景観が描かれている。井上新庄の谷に源を発する志野河が庄園の中央を西から東へ流れ、東側の粉河寺領との境を深田河と名を変えて蛇行をしながら吉野河（紀の川）へそそぐ。深田河の北に「井上ノ井戸」、「コ河の井戸」とあるのは灌漑用水の取水口と思われる。大小の溜池が庄園の東北部および西南部に集中している。集落は五～八戸の家屋群によって描かれ、「在家」と注記されている。大きな神社は風早神社のみであるが、小さな神社・寺院が数多く描かれている。耕地は日根野村絵図と同様直線の交錯によって示し、更にその内部に細かく稲穂を描いた上、[3] 耕地の種類を「田」、「フケ田」、「畠」、「田畠」と注記して示している。耕地の間には丘陵も描かれており記載内容の非常に豊富な絵図である。

第9図 紀伊国井上本庄絵図



(2) 井上本庄の現状と絵図の位置比定

井上本庄の庄域は行政的には現在の那賀郡旧長田村大字北長田・長田中別所・深田・嶋にあたる。南北に細長く、東西の巾は広い地点でも一粁にも満たない。地形的には大部分を紀の川の中位段丘面[4]が占め、吉野河沿いの段丘崖下の沖積面が一部含まれる。

絵図の東南隅の風早神社は粉河寺領との境界線上に置かれているが、現在も隣接する松井との大字境にあり、社殿が二つ並んだ様式も現在と全く変わっていない。北部の山麓に「山神」、「北山鎮守」が、中央に「号三百余所社」があるがいずれも現在は消失している。そのうち山神は宮の前という小字に跡地が伝えられているが、神体は風市神社境内に移されている。寺院は観音堂二つと、アミダ堂・薬師堂・観音堂・帝釈堂の計六つが見られるが、現在まで続いているものはない。

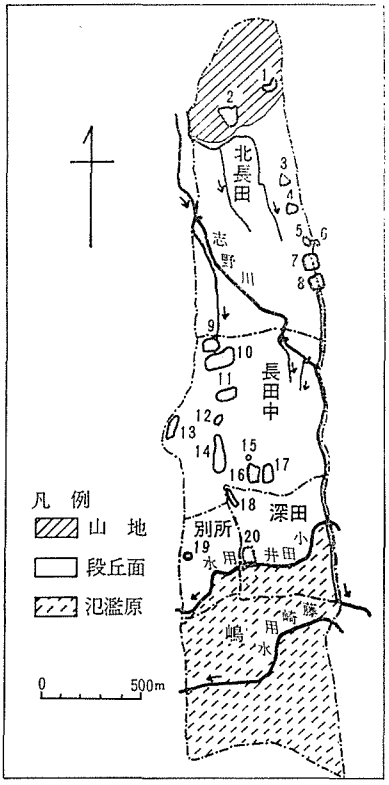
庄園の中央を流れる河は、志野河・深田河・門河と呼ばれているが、現在長田川と名称を変えて段丘を大きく開折して流れている。従って流路の変更の余地は余りないと考えられる。絵図によればフケ田付近を、深田河が「古垣内」の西を流れているが、現在この河は粉河町との境界となり、河の東側に井上本庄の集落は存在しえない。この付近では長田川は巾約百メートルの谷を刻んで流れており、その範囲内で東西に流路を変えたものと思われる。粉河寺領との境には

第10図　井上本庄地形図

「コ河ノ井戸」と注記が多く灌漑用水の取水口と考えられるが現在は全く取水していない。

溜池は大小合わせて十五、絵図に描かれている。絵図の位置および名称が共に現在まで継承されているのは第十一図に見る如く滝谷池・上池・林池・土呂〳〵池・道池・柿谷池である。金剛谷池は小田井用水の築造によって潰されたが、位置を比定しうる。従って溜池は十五のうち七つと約半数を比定しえ、この比定した溜池はいずれも段丘を開折した谷を利用して築かれており、いずれも天水を貯水し易い地点にある。規模はいずれも小さく、形も不規則で古い時代の溜池をうかがわせる。

第11図　井上本庄域の溜池と主要水路



溜池名

番号	池の名称	絵図の名称
1	滝の池	滝谷池
2	上の池	上池
3	蓮池	
4	林池	林池
5	西泥池	五呂五呂池
6	上泥池	
7	下泥池	
8	下泥池	
9	柳池	
10	平池	
11	子持池	
12	蓮池	
13	宮の池	道池
14	観音池	
15	コト池	
16	阿弥陀池	
17	皿池	
18	興津池	
19	垣内池	柿谷池
(20)	金剛谷池	金剛谷池

一方柳池・平池・阿弥陀池・皿池など段丘の平坦面のうえに築かれたいわゆる皿池は絵図には描かれていない新しい池である。これらは上流の余水以外には集水しえない。現在のこの地区の灌漑系統を見ると、近世の初頭に志野河の上流に桜池が築造されて⑤以来、周辺の二七村がその水懸りとなっている。第十一図に見る如く志野川の北部の北長田は、桜池の水路によってほぼ全域が灌漑される。特に注意すべきものは下泥池の下流にある七反田井樋である。これは絵

図に注記された「井上ノ井戸」の可能性がある。志野川の南は欠の井堰によって小字井田、東行寺・森崎・野手へ配水される。その余水が柳池・平池へ貯水される。開折された谷にある久保垣内へは松の井堰から、上清水・下流水へは清水の井堰より配水される。深田は桜池の水を貯水した阿弥陀池・皿池より灌漑される。沖積地は小田井用水と下位面は藤崎用水と両者で灌漑されている。

段丘上のいわゆる皿池も桜池の水に頼ってはじめて貯水できる。従ってそれらの溜池の大部分は桜池が築造された際、あるいは築造後に設置されたと考えられる。桜池築造以前に存在したいわゆる皿池については、重要な水源であった志野川の水を、段丘面へ取水できる井堰を利用して貯水したことも考えられる。しかし、当時の庄園内の灌漑全般を見ると、やはり庄園内に見られるような開折谷を利用した溜池の役割が高かったと思われる。

耕地の分布は前述の灌漑施設とも関連しているが、ほぼ庄園内の全域に見られる。絵図には前述の如く、田・間田・フケ田・田畠・畠・大迫・などの注記がある。田・間田・フケ田と記されている場所は北東部の溜池群の周辺、欠の井堰の灌漑区域と想定される道池の東の集落付近、小池等の東の地区、深田河の開折谷の松の井堰・清水の井堰の灌漑区域と想定される地区などである。また田畠と記されているのは吉野河の沖積地に限られる。井上庄の耕地には水田のみでなく水利の不便な場所には畠がかなり存在していたことが知られる。

集落は、六～八戸の家屋群が七つみられる。志野川の北には北村在家が二つに分かれて存在しているが、現在の北長田は欠尾・垣内・東尾の三小字に分散している。志野河の南の森前田と注記のある部分の集落は長田中の西垣内にあたり、その東の集落は東垣内である。古垣内は河の東への流路変遷によって西の段丘崖下に移動した深田である。庄園西南端の嶋村在家は吉野河の沖積低地に位置し、現在の島の集落である。但し風早神社の西の嶋村在家は深田に現在属している集落と考えられる。

(3) 中世の井上本庄

井上本庄の集落は、絵図から見て十四世紀末には小村状をなしていたと思われる。現在の集落も二〇〜三〇戸余りの民家の集まった小村をなしている。北長田の民家が分散し、深田の位置が変わり、別所が新しく形成された他は割合変化していない。既に近世の一集落＝一藩政村の基盤がほとんど完成されつつあったのである。

その背景として、段丘上の土地は地形を巧みに利用して溜池が築かれ、用水の引き難い地点は畠として開拓が進展していたことがあげられる。

① 早稲田大学文学部西岡研究室『荘園関係絵図展目録幷解説』昭和三五年・七八頁

② 京都随心院所蔵

③ 稲穂は繊細に表現されているため図では省略した。

④ 近藤忠「紀の川の段丘面の新開発計画」（『日本地誌ゼミナール・近畿地方』所収、昭和三九年）

⑤ 仁井田好古『紀伊続風土記』巻三一、天保一〇年

三　神護寺領紀伊国桙田庄

(1)　桙田庄と同絵図

桙田庄は西岡虎之助氏の詳細な研究によれば、①天長二年（八二五）在地の豪族日根秋友が桙田嶋六十町を開発したことに始まる。その四至は下居、南は大川、西は世山川前、北は四津谷および葛木峯によって限られる。日根秋友はその治田および畠を国免の地とし、子孫に伝えていった。その後有力者を頼って庄園としたと思われる。そして平安時代末期には後白河院庁が本家として伝領していた。寿永二年（一一八三）後白河院が神護寺に桙田庄を寄進する際に庄園絵図②が作成されたと考えられる。その複製が現地の宝来山神社に見られる。その付属文書によって桙田庄の寄進の様子が明きらかとなる。

神護寺領紀伊国桙田庄
後白河院御寄附　寿永二年十月十八日
在管伊都郡　　庁御下文在之

四至　限東下居　限南大河
限西世山河前　限北四津谷葛木峯

牓示五箇所
一所巽下居大垣内西鼻重作畠
一所南紀伊河南岸栢木本渋田庄堺
一所坤静河庄名手庄堺
一所乾静河西岸安穂法師作田堺
一所良静河庄高野本庄大松東小

谷口友国作

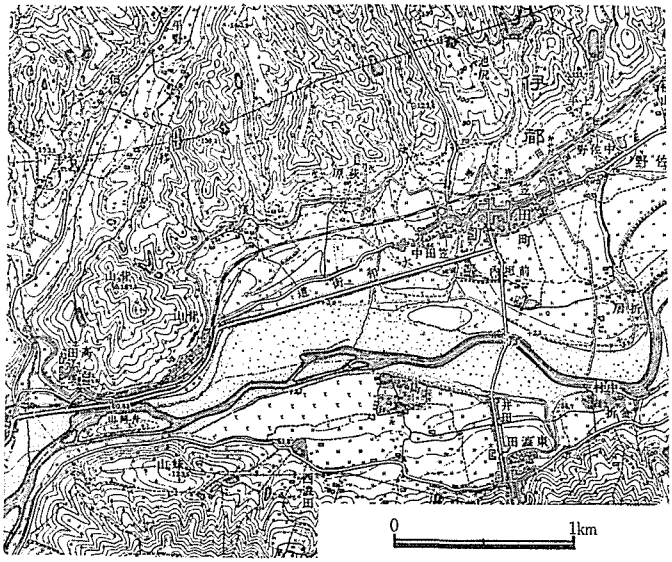
当時経蔵所納之庁御下文年号寿永二年十月十八日　同立券元暦元年八月十六日
両巻之四至牓示書出之事
延徳三年三月　日　年預多聞院
法印権大僧都（花押）

とあって絵図作成の契機となった庄園の寄進の経過および絵図の中に記された牓示の位置を知りうる。

桝田庄絵図は一一五・六×九六糎の和紙に描かれている。中央を東南に紀伊川が流れ静川が北部の葛木山と桝田の背後の丘陵大豆畑中山との間の谷を流れ、図の左端で直角に曲がった後、名手庄との境で紀伊川に合流している。南部は志富田庄をへて紀伊山地に連なる。桝田庄の四至は五箇所黒点にて示し、その位置は宝来山神社の所蔵文書の示す地点である。桝田庄内の集落は大豆畑中山の麓に四～六戸の三集落が分布し、大道沿いに五戸が街道状に並んでいる。桝田庄の東北に大きな鳥居を備えた八幡宮とお堂が祀られている。耕地は交錯した線で描かれている。その他紀伊川中の小島が目立つ。

第12図 紀伊国桝田庄絵図

第13図　桴田庄地形図



(2) 井上庄絵図の現地比定

桴田庄は現在伊都郡かつらぎ町の笠田付近にあたる。桴田庄付近には紀の川の上位段丘が分布しているが、紀の川の狭隘部にあたり、その狭隘部に舟岡山という小島があるため氾濫原が広がり、段丘面の幅が非常に狭くなっている。そして山麓緩斜面と山地が北部に並んでいる。静川沿いは谷底平野がわずかに展開している。

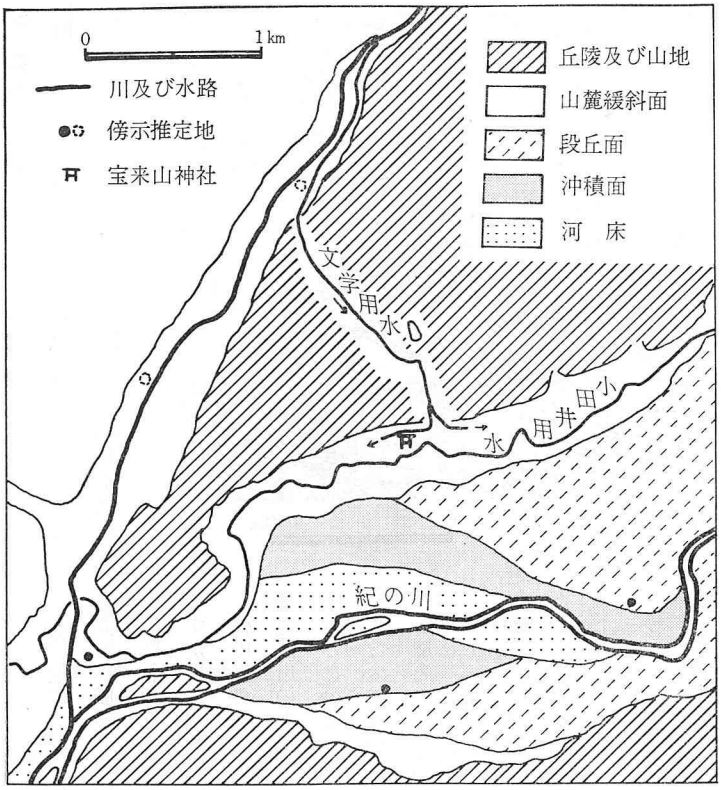
桴田庄の範囲を絵図との比較によって考察すれば、西は静川と紀伊川の合流点にて名手庄との境界となり、静川左岸は桴田庄域となっている。絵図では静川は曲流しているが、絵図の構成のためにゆがめられたものである。南は南岸の嶋が志富田庄との境をなす。嶋は近世には笠田に属し河津集落として繁栄していた。③志富田庄（渋田庄）との境界線は氾濫原と段丘崖との区界に重なっている。従って日根秋友が開発した桴田嶋と南限が一致する。又東限は下居大垣内西鼻とあって地名および河道が下居の西で拡大している点から現在の下居とも考えられる。しかし大道と記されている大和街道が直角に曲がり、支路が北部の丘陵を抜けて静川へ達していること、桴田庄内の八幡宮の位置は東限に近く、紀伊川南部の嶋の氾濫原が中央付近より東にないという三点から桴田庄の東限は笠田中と笠田東の境界と考えるのが妥当と思われる。

神社は八幡宮と堂の神宮寺が描かれているに過ぎない。八幡宮は境内も広く、立派な鳥居も有している。現在名称を宝来山神社と変え、社伝には「宝亀四年(七七三)和気清麻呂公八幡宮ヲ勧請シ……(一一八二)寿永元年ノ交ニ及ブ」とあって、④由来は古いが延喜式には登録されていないので正確な造営期は不明である。

庄園の範囲を示す牓示は現在一箇所も残っていない。

耕地は絵図に見る如く一面に交錯した直線によって描かれる。その分布範囲は大豆畑中山など背後の丘陵と大道までの間の土地、南岸の氾濫原および丘陵の西に広がる静川谷の土地にあたる。当時の嶋の耕地の範囲は、志富田庄域との境には段丘崖が示されていて、紀の川の自然堤防までの区域がはっきりと限定されている。又静川谷も山麓から谷底までの耕地をおのずと確定しうる。最も広い地区と思われる紀の川北岸の耕地を推測するため、この地区の灌漑系統を探ってみたい。

第14図　桙田庄域の地形および水賛図



まず最も重要な水源は小田井用水であり、山麓部の斜面を下流へ流れ、同時に南部の氾濫原に至る大部分の耕地を灌漑する。しかしながらこの灌漑水路は宝永四年（一七〇七）に築造されたものであり絵図の耕地を直接灌漑したものではない。次いで重要なものは丘陵の北部を流れる静川より取水して、丘陵の谷を抜けて、笠田へ出てくる文学用水（文覚用水）である。取水地点の北川から静川に沿って中家垣内付近まで流下して高度をあげた後水分峠を抜けて笠田に至る。水分にて萩原方と笠田方とへ分かれ四対六の比で水を配分する。萩原方は宝来山神社の背後にて更に二分して灌漑し、笠田方は上人池によって水量を補なった後に笠田中、笠田東へと灌漑する。文学用水を築く技術は非常に秀れたものであるが、後に小田井用水が引かれたため現在その灌漑範囲も狭少で山麓の緩斜面に限られている。

文学用水の水利権は強く、渇水期にも静川からの引水権を有している。この用水路の建設について何ら資料は伝わっていないが、伝承として次のように語られている。文覚上人が上覚を伴なって、調査を行なって四十八瀬川（静川）の水を引くことを計画し、土民を指揮して岩を切り開き、いわゆる文覚井（文学用水）を作りあげた。その真偽について十分議論は尽しえないが、絵図の耕地の水源として文学用水の存在を想定せざるをえないと思われる。文学用水で配水しえない場所には谷間の溜池が使用されたのであろう。

描かれた集落は萩原、背山、移である。嶋は集落がなく、紀伊川の北岸に街村が描かれているが、現在は氾濫原であってその痕跡は全くない。その位置は八幡宮のすぐ南であって、狭い場所であり氾濫を受け易い地点であるため描かれた街村も一時的に存在したにすぎなかったものと考えられる。

笠田は十二世紀末期には紀の川の用水を十分利用しえず、溜池、湧水　文学用水によって灌漑が行なわれたものの、背後の用水源も小さく、安定した耕地となる段丘面も非常に狭かった。更に紀伊川の氾濫原は不安定であったため庄園内の集落は数も少なく、小規模なものであったと推測される。

① 西岡虎之助「神護寺領荘園の成立統制」（『荘園史の研究』下巻一、昭和三一年所収）
② 京都神護寺所蔵
③ かつらぎ町教育委員会『かつらぎ町誌』昭和四一年
④ 前掲注③

おわりに

和泉山脈をはさんで南麓の河岸段丘と北麓の扇状地上に存在する三つの庄園村落についての以上のような絵図による対比によって次の事が言えよう。

十二世紀より十四世紀の畿内南縁の台地の開拓が行なわれるためにはまず溜池灌漑によって耕地が開かれることが条件として必要であった。同時にこれらの溜池は天水のみに頼らず河川からの取水方法が考えられている。すなわち日根野村の場合は湯川用水が、井上本庄の場合には志野川が、桙田庄の場合には文学用水が利用されている。

庄園と集落との関係を述べるなら、いずれの庄園の場合も複数の集落からなっている。そして藩政村と庄園の区画を比較すれば、日根野はそのまま庄園が藩政村へ移行しており、変化した地区は「荒野」とした個所にすぎない。井上本庄の場合は庄園内に藩政村の原型がほぼ形成されている。それに対し十二世紀の桙田は藩政村の芽生えは見えていない。

（京都大学教養部助手）

West——launched into their respective social and economic developments, which led to the various and heated controversies on the banks, tariff and public lands. On the other hand this age witnessed the collapse of the old regime and the rise of the two-party system under the influence of the sectionalism.

In this article we tried to explain the intrinsic features of the early Democratic Party by investigating how the Jacksonians confronted the imminent problems and what inconsistencies in the principle and the policy they were compelled to commit.

A Study on the Medieval Manor Settlements in the Southern Part of Kinki District

by

Y. Mizuta

This is the report of the investigation on the cultivations and the forms of the manor settlements in the middle ages through field-survey. These manors chosen as examples, *Hinenomura* 日根野村 in *Izumi* 和泉 (1316), *Inouehonjo* 井上本庄 in *Kii* 紀伊 (1393) and *Kasedanosho* 桛田庄 in *Kii* 紀伊 (1183) were located on the plateau in the southern part of Kinki district.

Considering the system of the irrigation which was drawn in the old map, we will know such a fact that the cultivated lands on the plateau were irrigated not only by the pond but also by the conduit that was led from the river to the river terrace. These manors, however, hadn't complete equipments to get water, so there remained many waste lands without being improved into the arable lands in the middle ages.

The manor villages as these, therefore, which lived upon the agriculture, were small in scale and few in number. And we can find the original pattern of the modern village in the *Bakuhan-Regime* 幕藩体制 in them except *Kasedanosho*.